

仲間とアイデアを形に

幻想的な竹灯籠やぼんぼりなど竹あかりが熊本市中心部の城下を彩る祭り「みずあかり」。今年も市民7千人が手弁当で準備し、今月10、11日にろうそく延べ5万4千個がともされた。約20万人が訪れる秋の風物詩として定着したこの祭りに、2004年の第1回から竹灯籠制作や演出で関わってきた。当初は崇城大の学生で、卒業後に研究室仲間の三城賢士さん(32)と竹あかり演出の会社「ちかけん」を起業。各地で竹あかりを使った町おこしや、結婚式場などの装飾演出を手掛ける。

「みずあかり」など演出する「社会冒険家」

池田 親生さん (33)



いけだ・ちかお 1982年6月、福岡県筑後市生まれ。崇城大工学部建築学科卒。07年に「ちかけん」を起業する前は、「ピースポート」での世界一周の船旅など、約40カ国を回った。熊本市中央区在住。

竹あかりは、放置竹林を間伐し、杉やヒノキを枯らす「竹害」を減らし、使用後は竹炭などに再利用するという循環型社会への思いを込めている。竹に穴をあければ誰にでも作れるシンプルさも魅力。来月1月からは三城さんと、竹あかりのメッセージを発信する日本一周の旅に出る。「各都道府県に1人ずつ、竹あかりプロデューサーを育てたい。そして東京五輪のときに、全国で竹あかりをとまて世界の人たちをおもてなしするのが目標。その中で僕たちが世界に出て行くチャンスもあると思っている」

活躍は竹あかり演出にとどまらない。旬の人を講師に呼ぶ市民大学「マチナカレッジ」の学長。食材付き情報誌「くまもと食べる通信」を創刊。東日本大震災の被災地支援。果てはサハラ砂漠のマラソン大会に挑戦したことも…。

間
く
語る

最新のプロジェクトが「河原町廃虚ホテル化計画」。熊本市中央区河原町の廃れた繊維問屋跡に近年、若手芸術家のショップが集まっているのに着目。繊維問屋の倉庫をゲストハウスに改装する。世界中から旅人が集まり、芸術家が表現に没頭できる場にした」と目を輝かせる。

改装費の一部はインターネッで小口資金を募る「クラウドファンディング」で募集。特典は「共同支配人」の名刺と「支配人として偉ぶること」ができること。こんな触れ込みで167万円が集まった。「社会には、ラフな気持ちで物事が始まる部分も必要だと思ふ。アイデアを出せる人はほとんど出して、やれる人が形を作っていくかないと社会は良くならない」

「社会冒険家」を名乗る。「社会起業家とか、社会活動家と言つとまじめすぎて、おちゃらけたこともできない。社会のためというのはもちろんありながら、面白いことをポップにやりたくて。自分が楽しむことが世の中のプラスになる存在になりたい」

人懐こい笑顔で仲間を引きつけ、周りをぐいぐいと巻き込んでいく。「大きな利益は出なくても、それぞれが好きなお金を稼げて、めっちゃぜいたくはできないけど、仲間とやれて…。実はそういうのが一番せいたくかもしれない。若い人たちを後押しするの僕らの冒険。仲間とどんどん熊本の『面白い』を増やしていきたい」。

(前田淳)